

令和三年 十一月六日実施

龍谷大学付属平安中学校

ドラゴンテスト問題

受験番号

国語

解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があったら解答用紙をおもて向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。（問題を持ち帰ることができません）

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

わずかに数羽しか残っていないトキは、国民の大きな関心を集めてきた。保護されたトキが卵を産み、ひながかえって育つ過程は、マスコミに大きく報じられた。二〇〇三年十月、日本最後のトキが死亡した。ある生物が地球上から消え去ってしまうという事実は心に訴えかける力がある。少し想像力のある人なら、トキの絶滅を招いたのは、環境変化だろうということに思いついたらだろう。実際にはトキのように個体数が減ってしまった生物を何羽か増やしたところで、もともと棲んでいた場所には帰せない。① 絶滅しそうな生物を保護しても、自然というシステムからはすでに切り離されている。自然というシステムから見れば、絶滅したのと同じことである。

≪ A ≫ 絶滅の危機を叫ぶと、逆にその意味が薄れる可能性がある。

具体的には、トキの保護に懸命な皆さんのようすが報じられると、「なぜあんなに必死になるのだろう。トキが死に絶えたつて、人間の生活に関係ないよ」と考える人も出てくるはずである。② メダカも同じである。メダカが絶滅しそうだといわれても、「童謡には歌われているけれど、食料になるわけでもないし、絶滅したって困らない」と考える人もいると思う。こういう発想が出てくるのは、ある生物が絶滅しても、それが自分はどう跳ね返ってくるか、それが見えないからである。

≪ B ≫ じつはそこに多様性の意味がある。自然はたくさん構成要素が複雑に作用しあう巨大なシステムである。システムというものは本来、それを壊そうとする力が働いても動かない、安定なものである。ある生物が絶滅しても、なにも起こらないようにみえるのは、自然というシステムがいわば「自動安定化機構」

をもっているからである。しかし、システムにも弱点はある。いわば思いがけないところをつかれたとき、一気に崩壊することもありうる。③ ピストルの弾ですら、人を殺すのである。

≪ C ≫

■ トキが自然界から隔離されても、いまのところ、自然というシステムはさほど影響を受けていない。しかし別の生物だったら、※ 破綻にいたることがあるかもしれない。それは、トキがシステムにとって重要でなく、別の生物が重要だという意味ではない。自然というシステムは、たくさん生物が影響しあって微妙なバランスを保っている。だから、どれかが欠けたときにどんな影響が現れるかは、よくわからない。そのときの状況によって左右されることもあるかもしれない。いまの場合、トキの影響は目に見えるほどではなかったが、別の条件の下だったらもっと深刻な事態を招いたかもしれない。I、長い時間が経ったあとで、大きな影響が現れるかもしれない。システムを構成するなにかが欠けたとき、どんな影響がいつ現れるかは、予測がつかない。

これを逆向きにいうと、システムを構成する要素は、システムを維持するためにもなんらかの役割を果たしている可能性があるということになる。II、システムの構成要素を※ いたずらに減らすことは慎むべきなのである。自然の構成要素である生物の多様性を保つ必要があるのは、そのためでもある。

≪ D ≫

実際に日本で、ある生物が絶滅したために、システムが大きな影響を受けた例がある。オオカミである。日本には昔、オオカミがたくさんいた。それは「山犬」という地名が残っていることから知れる。III、オオカミは明治時代に絶滅した。人間に追われて棲む場所がなくなっていたことと、犬の伝染

病であるジステンパーに感染したことが原因だという。最後まで残ったのは、おそらく山の深い紀伊半島であろう。

オオカミがいなくなれば、オオカミに食われていた動物が増える。その最たるものがシカである。奈良のシカは有名だが、東北でも、北海道でも、日本のあちらこちらでシカが増え続けている。最近では増えすぎてさまざまな弊害が出ている。道路に飛び出してきて運転が危ないし、牧場に入り込んで牧草を食べてしまう。生態系への影響も深刻である。自然というシステムのバランスを考えれば、人間がオオカミの代わりをしてシカを減らさなければならぬ状態である。それなのに、まだシカは手厚く保護されている。】

そこには、シカを殺すのはかわいそうだという情緒的な発想や、自然はそのまましておくべきだという④環境原理主義が働いている。しかし、天敵がいなくなったり、ある動物だけを保護したりすれば、システムのバランスが崩れ、別の生物が影響を受ける。システム全体のバランスを保つには、ここでも、⑤上手に自然に手を加える「手入れ」という思想が必要なのである。かわいそうだから殺さないというのは、システム全体から見れば、⑥かならずしもプラスにならない。

≪ E ≫
自然がシステムであるかわかれば、ある生物が別の生物よりも大切だとか、この生物は要らないという発想は出てこない。どの生物も生きていくことが大切だとわかるはずである。人間にとって有用か無用かという判断基準で分けるから、害虫と益虫といった分け方が出てくる。だが、人間が害虫だと考えようが、益虫だと考えようが、それとは関係なく虫は自然のなかで生きていく。⑦自然というシステムを構成しているという点では、どの虫も、ある意味で欠かせない存在なのである。

(養老孟司 『いちばん大事なこと』)

※(文中のことばの意味)

- 崩壊 : ぐずれこわれること。
- 隔離 : へだてはなすこと。
- 破綻 : 物事がうまくいかなくなること。
- いたずらに : むやみに。
- 弊害 : 害となる悪いこと。
- 情緒的 : 心に訴えてくるようなさま。

問1 文中から次の文章がぬけています。どこにあてはめるのがふさわしいですか。文中の ≪ A ≫ ≪ E ≫ から一つ選び、記号で答えなさい。

虫の世界でも、こうしたことは頻繁に起こっているはずである。しかし、人間の生活にあまり関係がないので、気づかれない。昔は害虫の大発生がよく問題になったが、最近はずぐに農薬を撒いてしまうので表に出てこない。そもそも、「害虫の大発生」というが、当の虫にしてみればシステムの条件変化に適応しただけのことである。イナゴ(サバクトビバッタ)は、乾燥した気候が続いて、餌が不足してくると、翅の長いタイプが生まれて大旅行をする。餌を求めたの集団飛行が大発生と呼ばれたのである。

※頻繁 : くり返し。

問2

I III にあてはまることばの組み合わせとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|----|-----|-----|-----|
| ア | I | あるいは | II | だから | III | しかし |
| イ | I | あるいは | II | しかし | III | だから |
| ウ | I | あるいは | II | そして | III | つまり |
| エ | I | たとえば | II | つまり | III | しかし |

問3

線①「絶滅しそうな生物を保護しても、自然というシステムからはすでに切り離はなされている」とありますが、どのようなことをいっていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一度保護された生物は、自然界のなかで卵を産むことはできるが、自力でひなをかえして育てていくことができないということ。
- イ 一度保護された生物は、大幅に個体数を増加させることができるまでは、保護され続けなければならないということ。
- ウ 一度保護された生物は、自然の中で自力で生きていくことや子孫を残すことができないので、自然界にもどれないということ。
- エ 一度保護された生物は、改めて自然界にもどされると、かえって自然のバランスが崩くずれてしまう原因になるということ。

問4

線②「メダカも同じである」とありますが、「トキ」の場合と「メダカ」の場合で、どのような点が同じだのですか。「く」という点」につながるように、線②よりも後ろの文中から十字以内でぬき出しなさい。

問5

線③「ピストルの弾たまですら、人を殺すのである」とありますが、どのようなことのとたとえですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 小さくても強い生命力をもった生物が、他の生物に与える影響力をうまくコントロールしなければ、自然全体が破壊されてしまうおそれがあるということ。
- イ 科学の力で生み出されたものは、思いもよらない環境変化を引き起こす危険性があり、自然に大きな悪影響をもたらすということ。
- ウ 自然界全体から見れば小さな変化しかもたらさないように見えるものが、実は全体に対する大きな影響力をもっているということ。
- エ 小さくても素早く行動するような事柄には、偉大な自然であっても対応が遅おそれてしまい、大きな被害を受けることがあるということ。

問6 ———線④「環境原理主義の思想が働いている」とありますが、このことには筆者のどのような意図が込められていると思われるか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自然のもつ偉大な力を認め、人間の力はおよばないとするひかえめな考えに対する支持。

イ 自然のシステムを、そのままにしておこうという発想に対する批判。

ウ 特定の動物だけを保護して、環境を優先的に守る動物愛護に対する不満。

エ 人間が都合よく、思いのままに自然をあやつろうとする考え方に対する疑問。

問7 ———線⑤「上手に自然に手を加える『手入れ』という思想」とありますが、どのような考えですか。「く」という考え」につながるように、文中から三十字以内でぬき出しなさい。

問8 ———線⑥「かならずしもプラスにならない」とありますが、このようにいえるのはなぜですか。「くから」につながるように、文中の【 】から四十字以内でぬき出し、そのはじめと終わりの五字ずつで答えなさい。句読点も字数に数えます。

問9 ———線⑦「自然というシステムを構成しているという点では、どの虫も、ある意味で欠かせない存在なのである」とありますが、「自然というシステム」を維持するために最も重要なことは何ですか。「くこと」につながるように、文中から十字以内でぬき出しなさい。

問10 ———線「絶滅の危機を叫ぶと、逆にその意味が薄れる可能性がある」とありますが、生物を絶滅から救うことの本来的意味とはどのようなことですか。本文の内容をふまえて、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の生活に役立つ生物種を絶やさないこと。
- イ 弱肉強食の自然界の中で弱い生物を守ること。
- ウ めずらしい生物を科学的な研究に利用すること。
- エ 自然のシステム全体のバランスを維持すること。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

七星は、パパの突然の提案で沖縄県石垣島へ家族旅行をすることになった。二日目の夜は星空バスツアーに申し込み、とても楽しみにしていたが、激しい雨で中止になってしまった。翌日には雨も上がり、石垣島の離島ターミナルから観光フェリーで十五分くらいの竹富島に来て、サイクリングで観光をすることにした。

それはともかく、とてもきれいな島だった。赤い琉球瓦が載った建物が並び、赤やピンクの花が咲き、石垣にはトゲトゲした多肉植物が生えている。竹富小中学校なんて、ほんとに可愛らしい建物だった。あちこち自転車を停めては、パパのスマホで写真を撮りまくった。いいお天気で、気分も上がる。レインコートや厚手の上着も持ってきたけれど、結局自転車の前籠に入れっぱなしになりそうだ。

少し行くと道も走りやすくなり、海に向かって気持ち良く自転車を漕いでいく。① 目指すは星砂の浜、カイジ浜だ。

南国の木立からはつと開けるように、海があった。駐輪するのにも②もどかしく、砂浜に駆けていく。

浜には先に来た人たちが、いっぱいしゃがみ込んでいた。星砂がなくなっちゃうと思い、慌ててわたしも適当なところしゃがむ。

思ったより、小石だの珊瑚のかけらだのがごろごろしている。波打ち際の濡れたところは探しにくかったので、じりじり移動して、ベストポジションを探っていく。

あちこちから、「ないー」、「見つからないー」という声が上がっている。ぎくぎくとまでは行かなくても、もう少し簡単に見つかるかと思っていた。

「※もう持つてるんだから、それでよくないか？」

そう声をかけられて、イラッとして顔を上げた。

「パパも一緒に探してよ」

そしてはつと気づく。パパは黒いナイロンの上着を着ていた。

「パパ、それ、ぬいで」

まるで※追いはぎのような勢いでぬがせて、それを砂の上に広げる。そこに、掌ですくった砂をさらさら落として薄くのばし、目を凝らしてみる。

「あったーっ」

思わず大声が出ていた。黒い上着の上で、②まるで天の川の中にある一等星みたいだった。

パパはわたしの行動に、「えーっ、ちよつとちよつと」と言っていたけれど、諦めたのか、一緒に探してくれた。

ブラックシート作戦は、我ながらナイスアイデアで、持ってきた小瓶の中には、少しずつ星形の砂が集まり始めた。それでも、二人でさんざん粘って、ようやく二十粒くらい。小指の爪の先ほどの量だ。本当はもっといっぱい集めたかったけれど、さすがに長い時間同じ姿勢でいるのもきつくなってきて、そろそろ移動しようということになった。パパは③あからさまにほつとした顔をしていた。

「昔からさ、七星は砂場で遊びだすと長かったよなあ」

上着をはたきながら、パパは言う。

「それ、幼稚園の頃のことじゃん。だけどさ、星砂ポトルって、お土産物屋さんでもいっぱい売ってたよね。あれ、誰がどうやって集めてるんだろ。大変すぎない？ こんなに見つかりにくいのって、取りすぎたせいじゃないの？」

わたしがそう言ったら、パパは「いやー」と首を振った。

「あれはさすがに浜でちまちま拾ってちゃ、追いつかないだろ。なんだか海の中の海藻に、いっぱいくっついてるんだってさ。」

それに土産物屋のあれはさ、外国産のもだいぶ混じってるらしいよ？」

「なんでそんなことを知っているの？ とは聞かなかつた。ママから聞いたに決まってるから。」

ママは星とか宇宙が、大好きだった。わたしの名前をつけたのも、ママだ。星がたくさん見えるから、いつか三人で※八重山に行きましようね、と言いつつ続けたのも、ママだ。

「これは、正真正銘の竹富島産だね」

わたしは小瓶を大切にポシエツトにしまい、またサイクリングを再開した。コンドイビーチ、西棧橋と見て回り、右折してまた島の中心部に戻っていく。

(中略)

少し休んでいたらもう昼過ぎだったので、近くのレストランでお昼ご飯にした。わたしはハンバーグとコロッケの定食で、パパは島野菜のカレーだ。

「昨日、七星の旨そうだったから」と言っていたけど、わたしのハンバーグとコロッケも、味見と言いつつけっこう食べていた。ものすごく量が多かったから、パパに助けってもらった感じ。食べ終わったら急に、パパが「じゃ、ホテルに帰ろうか」と言いだした。

「え、なんで？ 今日泊まるんだし、もつとゆっくりしようよ」

「ご飯も食べて元気も出たし、また星砂の浜に行ってもいいなと思っていたところだった。」

「いや、ちよつとね。③用事があるんだよ」

「ごによごによつと言いながら、伝票を掴んでさつさとレジに向かってしまった。」

またレンタサイクル屋さんの車に乗せてもらい、港に向かう間も、帰りのフェリーに乗っている間も、パパはやけに無口だった。機嫌が悪い、という感じじゃない。なにか気になることがあってユウウツ、という雰囲気だ。

④何だかよくわからない緊張感と、自転車を漕ぎまくった疲れも手伝って、ホテルに戻ってベッドにごろりと寝転ぶと、ほつとため息が出た。

そこでふと思ひ出し、ポシエツトから星砂の小瓶を取り出す。そして、思わず大きな叫び声が出た。

中身はまったくの空だった。ポシエツトの中で、いつの間にか栓が取れてしまっていたのだ。

「星砂がつ、星砂がつ」

あまりのショックに⑤半泣きになりながら、パパに空の瓶を見せる。ただぼうつと困ったような表情を浮かべているパパを見て、無性に腹が立ってきた。こんなことで泣くなんて、小さい子供みたいだと思ふのに、どうしようもなく涙がこぼれてきてしまう。

「——ほんととはもつと、竹富島にいたかったのに」⑥なじるように、わたしは言った。

「もつかい、星砂を探しにいきかかったのに。そしたら、瓶の栓が取れることにもすぐ気づいてたのに」

「……今さらそんなこと言っても……」

パパの言うとおりで、わたしも思う。ワガママな幼稚園児みたいなことを言ってるって、自分でもわかっている。

「だけど、とまらなかつた。」

「全然、全部、うまくいかないじゃん」しゃくり上げながら、わたしはなじるようにパパに言う。「星砂はこぼれちゃったし、すつごく楽しみにしてたのに、※星だつて見られなかつたし」「天気は、仕方ないだろう？」

低い声で、パパは言う。わたしはイヤイヤをするように首を振った。

「ママも一緒だったら、絶対晴れてた。あの人、超絶晴れ女だったもん……三人で星、見たかった。ほんとは、ほんとは、ママと三人で星砂を探したかった」

パパは深いため息をついた。

「仕方がないだろう？ ママは俺たちを残して、遠くに行っちゃったんだから……あの方は、神様に選ばれたような人だからね。※北極星になった、働き者で親孝行な弟みたいだよ」

「そんな言い方……」

⑥ わつと声を上げて泣きかけたとき、パパはいきなり上着を脱いでベッドの上に広げた。それからわたしのポシェットを「貸しなさい」とそつと首から抜き取り、黒い上着のシートの上で丁寧にひっくり返した。

「ほら、ちゃんとある。一粒もなくしてないよ」

上着の上には、わたしのハンカチやティッシュや細かな綿埃やチケットの半券や、アメの包み紙なんか混じって、まばらな星くずみたいな砂粒があった。

パパはそれを丁寧に拾って、小さな瓶の中に入れていく。慌ててわたしも一緒に拾う。

すべてを瓶に収めると、今度は上着の両ポケットをひっくり返した。

「何かじやりじやりすると思ったんだよな」

という言葉どおり、二つのポケットからはけっこうな量の砂粒が出て来た。その中から、わたしとパパは、ほぼ同時に別々の星形の砂を見つけた。それを瓶に詰め終えると、パパは得意気に言った。

「ほら、むしろ増えたぞ」

ニカッと、大きな口を開けて笑う。

「……ほんとだ」

わたしも思わず、笑ってしまった。パパはふと真面目な顔になって、言った。

「……今回の旅行はな、観光はほんのついでだったんだよ」

いきなりの言葉に、私は首を傾げた。

「ほんとはな、人に会いに来た。今、これから会いに行く」

「え、誰に？」

「おまえのお祖母さん……俺の、母親だ」

「……え？」

たぶんわたしは、ぽかんとした顔をしていただろう。

パパのお母さんは、パパがまだ小学生だった頃に、離婚して出て行ってしまったのだと聞いていた。パパの実家関係の人たちは、パパも含めて誰もそのことに触れない。一度だけ、酔っ払ったお祖母ちゃんが「幼い子供を捨てていくなんて、なんて冷たい女だ」と言っていたことを覚えている。

恐る恐るその話をする、「それは違うよ」とパパは首を振った。

「お祖母ちゃんは、ただ勉強がしかなかったんだ。結婚しても、子供が産まれてもね。それを、お祖母ちゃんも、お祖父ちゃんの両親も、許さなかった。それでまあ、色々あって、追い出されるような形になったみたいだな……お祖母ちゃん一人で」

「え、それなら、冷たいとか言われるのは可哀相じゃん」

「お祖父ちゃんにしてみれば、お祖母ちゃんさえ我慢していれば、ずっと家族一緒にいられたのにつてことらしいな。だけど、お祖母ちゃんに諦めなかったんだよ」

パパはそれ以上は語らず、「さ、出かける準備だ」と立ち上がった。

今までのラフな格好から、パパは少しだけきちんとした服装になり、わたしは少しだけ可愛い服を着る。

⑦ 着替えながら、思った。お祖母ちゃんは勉強することを諦めなかった。ということはつまり、パパのことは諦めてしまったってことじゃない？ お祖父ちゃんの「捨てた」という言葉はひどいけど、全部間違いつてわけじゃないんじゃない？

今回の旅行中、いや、旅行のことを言いだしたときから、パパは変にはしゃいだり、逆にユウウツそうにしたりしていた。パパはいつたい、どれだけの間、お祖母ちゃんに会っていないんだろう？

パパの緊張が、こっちにまで移ってくるようで、胸がドキドキしていた。

(加納朋子 『南の十字に会いに行く』)

※(文中のことばの意味)

もう持つてるんだから : 前日、観光で訪れた所でもらった

星砂のミニボトルを指す。

追いはぎ : 通行人をおどかして衣類や持ち物などをうばう人。

八重山 : 沖縄県南西部の島々のこと。石垣島や西表島などを含む。

星だつて見られなかった : 前日、雨で星空バスツアーがなくなつたことを指す。

北極星になつた、働き者で親孝行な弟

: 前日のバスツアーの際にガイドさんが話してくれた北極星についての伝説。怠け者の兄と、働き者の弟が、亡くなつた母親に会いたいと遠い向かい岸へ舟を漕いだがたどり着けず、兄は漕ぐのをやめて眠つてしまった。弟は会いたい一心で舟を漕ぎ続けたが、その先が滝になつていて舟ごと落ちてしまう。しかし、神様が弟だけを抱いて天に昇り、「おまえはここに留まつて、みんなの手本になりなさい」と言つて、弟は北極星になつた。

問1

~~~~~線①②③のことばについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① もどかしく

ア おもしろく  
イ はずかしく  
ウ 難しく  
エ いらだたしく

② あからさまに

ア はつきりと  
イ 急に  
ウ だんだんと  
エ ひそかに

③ なじる

ア いじめる  
イ 責める  
ウ お願ひする  
エ なげく

問2

——線①「目指すは星砂の浜、カイジ浜だ」とありますが、「カイジ浜」を「目指す」のはなんのためですか。文中のことはを使って、十字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問4

——線③「用事」とありますが、どういうことですか。十五字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問3

——線②「まるで天の川の中にある一等星みたいだった」とありますが、この表現を説明したものととして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

問5

——線④「何だかよくわからない緊張感」とありますが、その原因は何ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 黒い上着の上にたくさん星砂が広がっている様子を、夜空に輝く星の集まりである天の川のようにたとらえている。

ア パパの重苦しい雰囲気。  
イ パパの腹立たしい態度。  
ウ パパの落ち着きのない言動。  
エ パパの不機嫌な様子。

イ 黒い上着の上に広げた砂の中から星砂がはっきりと認識できるようになったことを、夜空で一番明るい一等星にたとえている。

問6

——線⑤「半泣きになりながら」とありますが、なぜですか。三十五字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

ウ 黒い上着の上の砂からようやく星砂を発見した喜びを、天の川の中から一等星を見つけた喜びと同じだととらえている。

エ 黒い上着の上でも星砂を探し出すのが難しいということ、夜空に広がる天の川から一等星を見つけることに置きかえて伝えている。

問7

——線⑥「わっと声を上げて泣きかけたとき」とありますが、この時の七星はどのような気持ちですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア パパの言うとおりでだと納得する一方で、星砂がこぼれたことやママがいなくなっただけで、現実を受け入れられない自分もいて、混乱する気持ち。

イ 自分が泣いていても見ているだけで何もしてくれないパパより、何でも知っていて頼りになるママと一緒にいたかったのにと、やるせない気持ち。

ウ もう一度星砂を探しに行きたかったことや、星空を見に行くことなど、パパが自分の希望を一切聞いてくれないことが腹立たしくて仕方ない気持ち。

エ 旅行が思い通りに進まないことで、本当は家族三人で旅行を楽しみたかったというわがままを思わず言ってしまう、後悔する気持ち。

問8

——線⑦「着替えながら、思った」とありますが、どのようなことを思ったのですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お祖父ちゃんの言っていた、お祖母ちゃんがパパを捨てたというのは間違いではなく、実はパパ自身もお祖母ちゃんとのせいで家族一緒にいられなかったのだと、うらんでいるのではないかとということ。

イ お祖母ちゃんが勉強を優先したということは、家族と過ごすことを諦めたということかもしれない、そんなお祖母ちゃんとの再会にパパがどれだけ緊張しているだろうかということ。

ウ 旅行前からパパの様子がおかしかったのは、お祖母ちゃんとの再会に緊張し、不安を覚えているからであり、自分を捨てたかもしれない人とわざわざ会う必要があるのだろうかということ。

エ パパにとって、長年会えていないはずのお祖母ちゃんとの再会は嬉しいことであり、その一方で、お祖母ちゃんが家族よりも勉強を選んだことに納得できない部分もあって、複雑な気持ちだろうということ。

問9 文章全体から読み取れる、パパと七星の関係について説明したものととして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 二人にとって母親の存在が大きく、それぞれの母親のことが原因で、旅行を楽しむことができず、気持ちを通い合わせることに苦労している。

イ ママと一緒にいられない寂しさを抱える七星に、パパは静かに寄り添い、七星もまた、母親に置いて行かれた過去を持つ。パパの気持ちを押し量ろうとしている。

ウ ママを恋しく思っている七星は、パパが母親から必要とされなかったのではないかと疑っており、何があってもパパの味方でいようと決意している。

エ 二人の会話はあまり多くないものの、パパは少しわがままな七星の行動に優しく付き合ひ、七星もパパのことを気づかって明るく話しかけるようにしている。

問題は次のページにつづきます。

三 次の①～⑤の文の——線部の中から主語にあたるものを一つ選び、記号で答えなさい。

① ア私の イ父は、 ウ昨日 エ出張で

オ東京へ カ行った。

② ア今日は、イ待ちに ウ待った エ私の

オ誕生日です。

③ ア一見 イかかれて ウいるように エ見えるが、

オこんな カ木でも キ生きている。

④ ア多くの イ人々を ウ乗せて、 エたくさん

オ走って カくれたね、 キこの ク蒸気機関車は。

⑤ アかぜを イ引いて ウ寝て エいた オ母も、

カ犬の キ鳴き声で ク外に ケ出しました。

四 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

① 税金をオサめるのは国民の義務です。

② ゴツカンの地へ旅に出る。

③ 手荷物をアズける。

④ 今月は特に電気のセツヤクを心がけた。

⑤ 彼は私にとってムニの親友である。

⑥ 夜半過ぎに事件は起こった。

⑦ この旅も終着点に至る。

⑧ 図書係を務める。

⑨ 書類を簡易書留で送った。

⑩ 均質な水溶液をつくる。

これで問題は終わります。